
悪役も大変なんです

ひるこ たつみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪役も大変なんです

【Nコード】

N1082D

【作者名】

ひるこ たつみ

【あらすじ】

正義のヒロイン『レオガイガー』と暗黒將軍『ブラックナイト』を幼馴染に持つ『ゾンガイガー』こと俺、境灰斗^{さかいかいと}。幼馴染二人は実は恋する女の子。お相手は二人揃って、俺。毎日が大変だあゝ。カイトの日常を描いた戦隊悪役ほのぼのコメディです。

ブローグ

「ウキー！ウキー！」

ヘルメットと竹刀を装備したおさる兵達が戦っている。

相手は正義のヒーロー、聖獣仮面『レオガイガー』。

あれ、女の子だからヒーローじゃなくてヒロインかな？

まあ、どっちでもいいや。

赤のピッチリとした衣装に身を包み、華麗におさる兵達と闘うレオガイガー。

「おさる兵さん達！頑張ってくださいー！！」

そして、これまた黒のピッチリとした衣装を身にまとい、ビクビク怯えながらも、後ろで頑張って——もう涙を浮かべるほど必死に——応援しているのが俺の幼馴染の黒野 夜子（くるの やこ）15歳。

身長は141センチの幼女体系で茶色っぽい小さなツインテールがトレードマークの女の子。

しかも、いまだに小学生に見られるほどの童顔で、本人は結構それを気にしているらしい。

今は目元を黒い仮面で隠してるからわからないけど、たれ目ではにやほにやした感じの中学3年生だ。

なんと彼女、悪の組織『ブラックローズ』の『ブラックゲン大帝』の一人娘にして、暗黒將軍『ブラックナイト』なのだ。

ビシバシとやられていくおさる兵達。

「きゃー！おさる兵さんがあー！！」

もはや涙を滝の様に流す夜子。

いよいよ、雑魚も消えて暗黒將軍ブラックナイトと聖獣仮面レオガイガーの一气討ち。

響くレオガイガーの高い声。

「サンタさんを誘拐してプレゼントを独り占めなんて、絶対に許さないんだから！」

因みに、さつきも言ったように、レオガイガーも女の子。本名は、

夏木 音子（なつき ねこ）17歳。

身長は160と結構高いんだけど、スリーサイズは可哀相でいえないくらいツルペツタンな高校2年生。

レオガイガーの時は口元を銀のマスクで隠してるだけだから、ぶっちゃけ隠してるつもりなのか微妙だが、キリッとした目と黒くて長いポニーテールが特徴の美人顔。

お父さんが元正義のヒーローで、その跡を立派に継いでる頑張り屋さん。

実はこっちも幼馴染、っていうか俺達三人とも幼馴染なんだけどね。ヤコは俺の妹みたいなもんだし、ネコはマブダチって感じだし。

そんな二人が戦ってるんだから正直微妙な心境な俺。

でも止める訳にもいかないんだよねあ、これが。

だって、俺は――

「はっ、お前はゾンガイガー!？」

「おにい〜ちゃ〜ん!!!!」

登場した俺を睨むレオガイガーと、俺に向かって泣きながら走ってくるブラックナイト。

そっ、俺ってば悪役なんだよねえ。

そろそろ自己紹介をしようかな？

俺の名前は、境 灰斗（さかい かいと）17歳。趣味は読書、彼女いない歴17年。身長は171センチだから、あと4センチは欲しいと思ってる。

ブラックローズ所属の元聖獣仮面……って設定の死獣仮面『ゾンガイガー』をやってる高校2年生。

さっきも言っただけど、この二人とは幼馴染で、ネコとはクラスメイトでもある。

二人は俺の正体を知ってるし、俺も二人の正体を知ってる。

なのに、だ。何故か二人は互いの正体を知らないんだよね。

お陰で色々と大変な生活を送ってる俺。

特に何が大変って――

「おにいちゃん！こわかったよう〜！！」

「あ、こら、ブラックナイト！カイっ、じゃなかった、ゾンガイガーから離れなさい！！」

俺に抱きつくブラックナイトと、それを頬を赤らめて咎めるレオガイガー。

どうやら俺は二人に好かれちまってるらしい。

もう、完全に板挟みな俺。

「離れなさい！！」

「おにいちゃん！！」

はあ、なんて苦労人な、俺。
誰か、たすけて〜！

ブローグ（後書き）

どーも、ひるこですw

ブローグ書き上げました〜w
気付けば、もう4時ですよ、4時。

なんてアホな私（トホホ）

そんなアホな私が書くアホな小説ですが、感想とか頂けると、感動して泣きます（笑）

それでは、続きも読んで頂けると信じて、おやすみなさ〜いw

第1話：日常／ランチ編／

キンコーンカーンコーン

古びた校舎だが、中高一貫で、サイズだけはバカデカイ、千隊学園（せんたいがくえん）。

昼休みの始まりのチャイムが校内に響く。

高校棟二年二組。教室内の空気が一気に弛んで、授業が終えられた。ここから、学食・購買組は決戦の時を迎える。

駆けだす生徒達。もちろん、弁当なんて作ってくれる彼女もいない俺は、その先頭を走っている。

続々と各教室から歴戦の勇者達が参戦してくるが、ゾンガイガーとしての超人的な身体能力を駆使する俺に叶う者がある筈もなく、見事俺はいつものようにトップを維持したまま購買へと到着した。

「おばちゃん！カツサンドとやきそばパンとセンタイデラックス！
」

一番乗りを果した俺が頼んだのは購買人気パン上位3つだ。

中でもセンタイデラックスは一日三つ限りの超レアな代物で、なんとパンの間に挟まっているのは高級松坂牛のサイコロステーキ。

そりやもう大人気で、この学園に通い始めてからまだ数回しか食べた事のないほど競争率が高い。

え、いつもトップで来ているのに買えないのだった？

そつ、買えないのだ。その理由は――

「あら、ごめんねえ。今日はデラックスパンは生徒会が予約してるのよねえ。」

皆さんにも、もうお分かり頂けたらう。

そう、本来予約は受け付けないこの購買も、生徒会限定で予約を許可しているのだ。

俺は仕方なくコロツケパンに注文を変えて、ガツクリと項垂れながら、もみくちやの生徒たちを掻き分けて購買部を後にした。

自販機でコーヒー牛乳を買おうと立ち止まった時、すれ違った女一人男二人の三人組。

彼らこそがこの千隊学園の最高権力者集団、千隊学園高等部生徒会にして、正義のヒーロー聖獣仮面三人集なのだ。

会長兼レオガイガーのネコ。副会長兼ドラガイガーの安東 龍也（あんど う たつや）。書記兼ウルガイガーの秋田 健二（あきた けんじ）。

そう、彼らはその正体を明らかにして、特別扱いをうけているのだよ。

そりゃ皆の平和を守るあいづらは、もうチヤホヤされ放題。

そんなこんなで、購買でも特権階級なあいづらは、殺気立つ一般生徒を尻目に、待っていた別のおばちゃんからセンタイデラックスを買っていた。

悪役である俺は、当然ながら正体を明かす訳にもいかず———というか明かしても逆に虐げられるだけだろうが———さらにションボリと屋上へ向かうのだった。

「あ、カイト……良かったら一緒に……」

「ほら、会長。さつさと生徒会室に戻りますよ」

「何つつたってんだ、早く戻ろうぜ」

「え、でも私はカイトと……」

ん？なんか声が聞こえた気がしたんだけど……気のせいだよな。

ガチャ、ギー……バタン

と、いうことで屋上に到着。さて、11月も終わりなこの時期に、屋根のないこの屋上で、身を震わせながら飯を食うのには、もちろん理由がある。

ガチャ

「おにいちゃん！ん！！」

ギー……ボスツ、バタン

因みに今のボスツて音は、ヤコが俺の鳩尾に愛のタツクルを決めた音だ……ぐはっ。

もはや泡を吹いて倒れそうな俺に、シツカと抱き付きハイテンションな悪の將軍。

そう、彼女がその理由である。

「ぐ……だ、だから、タツクルは止めると……いつも……」

「さ、今日も悪の作戦会議だよー！」

完全に俺を無視して弁当を広げるヤコ。まあ、いつもの事だ。気にしてもしょうがない。

さて、俺達が誰も居ない屋上で飯を食う理由。

それがこの“悪の作戦会議”という名の、ヤコとのランチである。

悪の、というからには人目につく場所ではダメだ、ということで屋上なわけだが。

片や暖房、テレビ、マッサージ機に、はてはプリステ4——プリステ4は間違っていると思うのだが——まで完備の生徒会室で、優雅にランチの聖獣仮面。

それにくらべて、ふきっさらしの屋上で、ガタガタ震えながらラン

チのブラックローズ。

うう、泣きたくなるぜ。

しかし、それでも満面の笑みを浮かべて俺のあぐらの上——なんでも少しでも温かくなるためらしい——にすっぽりおさまって、小さな可愛いお弁当箱をつつつきながら、一生懸命悪だくみ——と、言ってもささやかなものばかりなのだが——をするヤコを見ると、ついつい頬が緩むから不思議だ。

「それでねえ、ヤコは今度はおさる兵達でラジオ体操を——」

いつも一生懸命なヤコは楽しそうに次の作戦を立てている。

どれどれ、俺も頑張りましょうかね。

「いや、それよりもエムエイチケーのおばあちゃんと一緒にだな——」

こうして今日も平和な悪の作戦会議が続くのだった。

第1話：日常〜ランチ編〜（後書き）

ども、第1話を読んで頂き感謝感謝ですwww

まずは日常のワンシーン——特にヤコちゃんとの——を書きたくて書いてまいりました（コラコラ）

でも、なんだか当初の目的から外れてヤコちゃんの出番が少なめになっちゃいました（ションボリ）

次回こそはと心に決めて

第2話も読んでいただけると信じて、アディオスw

第2話：日常〜下校前編〜

さて、やっと学校も終わって放課後。

俺はブラックローズのお仕事があるから部活には入っていない。

だから、HRが終わり次第さつさと昇降口へGO。

放課後も部活や委員会に精を出す皆さんを尻目に、靴を履き替えて

……と。

さて、そろそろだな。

俺はクルリと中等部用靴箱の方へと向き直り、両手を広げ、キャッチの構えをとる。

「お〜にい〜ちゃ〜ん!!!」

来た来た来た。いつも元気な暗黒將軍。

下校時のこのタイミングで、必ずと言っていいほどの確率でやってきては、見事なタックルを味あわせてくれる、可愛い幼馴染。

ヤコは俺が待ち構えていたことが嬉しかったのか、さらに速度を上げて突っ込んでくる。

だが、今日は構えもバッチリだ。見事なキャッチを見せてくれよう！
目標到着まで、あと5、4、3、2、1っ！

ガチーン！

……あ、星が見えるよ、父ちゃん……バタッ。

「って、今一体何があつたんだ!？」

俺は勢い良く首を持ち上げて、俺の身体の上でおでこを抑え、涙を零しているヤコに条件反射の要領で尋ねる。

と、言っても何があったかは解ってるんだけどな。

ただ、標的の予想外の動きに咄嗟に対応できなかっただけで。

……と、いうか退けてくれ。周りの視線が痛い。

そんな俺の思いとは裏腹に、ヤコは答えもせずに、俺に抱き付いて泣き出すのだった。

そりゃ、痛いわな。

あの速度でジャンピングヘッドバッドを決めたらさ。

「うえ~~~~ん、いたいよ~~~~!!」

結局泣きわめくヤコを、なだめたりすかしたりと悪戦苦闘の末——
泣いてるヤコは聖獣仮面の100倍手強い——なんとか、泣きやんで頂いて、ヤコのリクエストで、幼稚園の先生と園児よろしく、お手々つないで仲良く下校。

ああ、視線が……視線が痛いぜ。

「……つく……ひつく……おにいちゃ……ごめ……ね？」

ヤコが小さな手で俺の指をシツカと握りながら謝る。

そりゃもう、しゃくりながら、瞳の許容限界ギリギリまで涙を溜めて俺を見上げて、だ。

そんなヤコを責められる筈もなく。

「もういいから、泣きやめって。嬉しくって飛びついちまったんだよな？もうわかったから」

「えぐ……う、ん……ヤコね……おにいちゃ、が……手を広げて待っててくれたから……」

そう、何故あんなことになったのか。

ヤコはいつものように俺に愛のタックル——本人は抱き付いてるだ

けどというが、俺は断固としてそれを認めない——をかまそうとして、走ってきた。

するとどうだろう。俺が手を広げて待っているではないか。

嬉しくなったヤコは、加速。

そりゃもう流石は暗黒將軍の加速、素晴らしい加速だったよ。

しかし！そこまでなら俺の予想範囲内で対応できたんだ。

問題はこのあと。

もう嬉しい嬉しいヤコは、飛んだ。

いや、ホントに“跳ぶ”を超えて“飛ぶ”、な。

俺は小さなヤコを受け入れるために斜め下へと構えていた。

しかし、ブラックナイトの跳躍は、一瞬にしてヤコを俺の視界から消し——昇降口の天井スレスレの高さまで飛んで——俺が慌てて上方を向いた時には、ヤコの満面の笑顔があった。

もう、紙一枚間に入るか微妙なくらい、すぐ目の前に。

「もういいから。帰りにヤコの好きな南国堂のチョコバナナ買って帰ろう、な？」

「うん！ヤコね、おにいちちゃん優しいから大好きだよ！！」

責任追及権を無条件放棄した俺は、空いてる方の手で、尻のポケットに財布があることを確かめながら、まだ潤んだままの瞳で嬉しそうな笑顔を浮かべるヤコに、自然と零れる優しい微笑みを返して校門を出たのだった。

……で、終われば良かったんだが。

校門を抜ける時に、遙か上空——高校棟校舎三階生徒会室方面の——から降って来た影。

俺達が校門を抜けきるまでには進路上に立っていたその少女に、大きく溜息をつくくらい、俺にだって許されるよな？

「あ、カイト、偶然ね。……？溜息なんてついてどうかしたの？」

俺はご自慢のポニーテールを揺らして、小首を傾げる彼女を見て、改めて溜息をこぼすのだった。

第2話：日常〜下校前編〜（後書き）

どーもw

本日で三作目なひるこですwwww

初めてコメント頂いちゃいました記念で書いちゃいましたwwwwww
まあ、豚もおだてりや木に登る、と（笑）

そんなこんなので、ヤコとの下校編でした^^b

今回はネコと合流し、さらにはちゃめちゃになりそうで怖い、ひるこでした〜^^;

それでは次回も読んで頂けると信じて

しーゆーあげいんw

第3話：日常／下校後編

背の高いお父さんとお母さん。

その間にいる幼い少女が、二人の手を握って楽しそうに話しかけている。

ああ、今にも聞こえてきそうだな。

やけにお若いご両親ね、とか……。

違うっ、違うんです！

俺達は仲の良い幼馴染で、今下校の真つ最中なんです！

……と、心の中で、言い訳をしながらの仲良し下校。

唯一の救いは、三人とも学園の制服を着ているお陰で、実際に言い訳をしなくていい事くらい。

……ああ、今すぐ逃げて帰りたい。

それでも、俺とネコの間でご機嫌なヤコを見て、そんな事できるわけもなく。

ホントに嬉しそうなんだもんなあ。

もう、100点満点の笑顔っていうのかな。

この笑顔を壊す奴がいたら、問答無用で成敗だな。

でも……やっぱり、周りからの視線が痛い……うう。

と、いうわけで下校中。

見ての通り、ネコと合流した俺とヤコ。

ネコとヤコの二人は、一緒に帰る時はよく手を繋いで帰る。

普段ならそんな光景に、ほのぼのとした気持で微笑むんだけど。

いかんせん、今日は俺までヤコと手を繋いでしまっているもんだから、もう後ろ姿は完全に仲良し親子。

ネコが来たから、もう手を離して良いかって聞いたら、ヤコの奴、一瞬でウルウルモード突入。

ヤコのウルウルモードに敵うわけがないじゃないか。

結局、流石に恥ずかしがるネコですら、あの瞳には勝てず現在にいたる、と。

ネコもどんな風に見られているかが分るのだろう。

普段は白い頬を、うつすらと桜色に染めて、軽く俯きながら歩いている。

そんなネコを見て、ちょっとだけドキツとしたのは内緒だ。

さて、この様子からして、レオガイガーとブラックナイトの二人が、普段は仲良しだと分って頂けると思う。

これも全て二人が互いの正体を知らないおかげだ。

しかし、以前述べたと思うが、ネコを含む生徒会メンバーは、学園内ではその正体を公表している。

それなのに何故ヤコが気付かないのかと、不思議に思ってる人もいるだろう。

その理由は二つある。

その内の一つは――

「あ、会長。今日はレオガ――」

「ああ！今日はレオ君はお休みしたみたいね！？」

「え、あつ！そ、そうなんですよ。どうしちゃったんですかねえ、れ、レオ君。」

ははは……なんて、不自然に笑いながら去っていく、隣のクラスの後藤君。

可哀相な奴。

ネコの、ものすごい気迫を前にして、敬語になっちまってるよ。

でも、今のワンシーンに、一つ目の理由の全てが込められているんだよな。

とりあえず、今何があったのか、わからなかった人のために、今のシーンをもう一度見てみよう。

「あ、会長。今日はレオガ——」

はい、ここで後藤君は、おそらく「今日はレオガイガーの仕事は？」とか「レオガイガーは休み？」とか聞こうとしたと思われる。

しかし、その途中で、おっそろしいプレッシャーを掛けながら、ネコが言葉を遮った、と。

おそらくこの時、後藤君は地獄で微笑む阿修羅を見た事だろう。

そして、後藤君は、ネコの隣りで不思議そうにしているヤコに気づいた。

「え、あつ！そ、そうなんですよ。どうしちゃったんですかねえ、れ、レオ君。」

と、というのが丁度その瞬間だな。

この、不自然な「れ、レオ君」でわかる通り、俺の知るかぎり、うちの学年には“レオ”なる生徒はいない。

まあ、苦しい誤魔化しに突っ込んでもしかたがない。

問題は、“何故誤魔化したのか”だ。

実は、ネコはヤコにレオガイガーだとばれたくないらしい。

その理由は簡単。

ヤコはおさる兵が大好きだからだ。

おさる兵つてのは、ブラックローズの兵士——こう言っちゃ悪いが、解りやすくいうと、戦隊モノのザコ兵——だ。

ただそれだけなら、むしろ、おさる兵が好きなヤコが疑われそんなものだが。

実は奴ら、その愛くるしい姿が——俺にはそうは思えないが——巷の女子に結構人気があったりする。

なので、ヤコがおさる兵グッズを部屋に大量に持っていて——実際、ヤコの部屋はおさる兵グッズで埋めつくされている——不思議ではないのだ。

それで、そんなおさる兵が大好きなヤコに、自分がおさる兵をボッコボコに倒しまくっているレオガイガーだとばれたくないんだと。そう、理由その1は、ヤコの事を実の妹のように可愛がるネコが、おさる兵が大好きなヤコに、おさる兵を倒しまくっている事をばれたくないから。

勿論、うちの学園全体に、学園の最高権力者——その権力は、学園長をも凌駕すると言われている——の高等部生徒会会長から、ヤコに対しての緘口令が出されている。

緘口令は、学園外部に情報が漏れるとヤコにはれる可能性があるため——俺としては、せめて建前だけでも、ブラックローズにはれる可能性があるためと言って欲しかった——、外部にも漏らしてはならないという徹底ぶりだ。

緘口令に違反した者は、地獄よりより恐ろしい体験——ってブラックローズよりも怖いぞ！？——ができるのかなんとか。

ま、それでネコと後藤君は慌てて誤魔化したんだな。

そして、理由その2だが……。

実際のところ、こっちの方がばれない理由の本命だろう。

どうあがいたって、あれだけ不自然な——そのうえバレバレな——会話や、行動を見れば、普通は気付くか、せめて疑問を抱くだろう。普通なら、な。

そう、理由その2とは——

「レオ君って人、学校休んじやったの？風邪かなあ。ネコちゃんも気をつけてね？」

心配そうにネコを見上げるヤコ。

ま、そういう事なんだ。

これで、わかんない人はいないだろうけど、一応ハッキリと言っておくな。

ヤコはとつつつ……／＼都合により一部略／＼……っても、ニブチン

なんだ。

それはもう、学園に入ってから三年間、さっきみたいな事は数えきれない程あったのに、未だに全然気づく様子もない程に。そして……、

「そ、そうね。季節も季節だし、ヤコも気をつけるのよ?」

とか、まだ動揺しながらおっしゃってるネコさんなわけだが。こいつも、ヤコとどこいいなニブチンなんだな。

え、どうしてそんなことが言えるのかって?

だって、なあ?

レオガイガーとブラックナイト。

片方は口元を銀のマスクで覆ってるだけ。

もう片方は目元を黒い仮面で隠してるだけ。

……普通、気づくでしょ。

ま、そのお陰で、今日も学園の平和は守られているんだけどね。

「おにいちゃんも風邪には気を付けなきゃダメだよ?」

心配してくれてるのだろう。

俺の指を握る手に、ギョツと力を込めてくるヤコ。

俺はそんなヤコの頭をくしゃりと撫で。

誤魔化し切れて安心したのか、ほっと息を吐くネコと目を合わせて苦笑した。

あ、因みにだけど、俺がネコに正体がばれているのに平気なのは、俺がヤコに正体をばらさない代わりに、学校では休戦にしてくれてるんだとき。

ま、でもホントのところは、目が合っただけで頬を染めたネコの子が、一番の理由なんじゃないかなって思ってるんだけどね。

第3話：日常〜下校後編〜（後書き）

ああ〜……なんだか、早くもネコのキャラが壊れてきている気がするひるこです^^;

ヤコにはかり焦点を当てたので、今度はネコに焦点を当てようと思ったのですが……なんか説明ばかりになってつまらない話になった気がして不安です……;

こんなダメダメなひるこですが、応援・ご指導等大歓迎ですので、どうぞ一言、声をかけてやってくださると嬉しいです^^

あ、蛇足ですが、昨日は一気に三話もupしたからでしょうか。なんとアクセス数が1000を超えるという快挙でしたw
読んで下さった皆様。本当にありがとうございました^^

第4話：日常〜休日編〜

「また、あがりい！ えへへ、ヤコが一番乗りだよ！」

ご機嫌な様子のヤコ。

早速だが、今俺達はヤコの家でゲームをしている。

メンツは俺とヤコ、そしてネコの三人。

やっているゲームはキンタロ電鉄5。

電車で世界を回る双六で、プリステ4のゲームだ。

さつきから、俺とネコはそのゲームで、強運を見せるヤコに5連敗中。

「ねえねえ、ヤコ凄いでしょ？ ね？ ね？」

キラキラした目で俺を見るヤコ。

ヤコのこの目は「褒めて褒めて」のサインだ。

敗者に称賛を求めるのは、実に残酷な話じゃないかと思うんだが、苦笑しながらも、つつい撫でてあげてしまうんだから、つくづく俺も甘いよなあ。

クシャクシャツと撫でながら、「ヤコは凄いなあ」なんて褒めてやると、尻尾をブンブン振るのが見える程、嬉しそうに笑うヤコ。

さて、この部屋にはそんなヤコを見て、深く項垂れている少女がいる。

ヤコの姉貴分、ネコだ。

ネコは、ヤコを実の妹のように可愛がっている。

だが、それ故に、ネコは姉としてのプライドを持っている、らしい。

実は俺とヤコは、3回目くらいで終わりにしようとしたのだ。

しかし――

「ま、まだよ……次こそは勝つんだから！」

頂垂れていた頭を勢いよく起こして、うつすらと瞳を潤ませながらもコントローラーを握るネコ。

そう、ネコが終了を許さなかったのだ。

姉の沽券にかかわるとでも思っているのか、何度も再戦を申し込み続け、今まで全敗。

もうそろそろ諦めたかと思っていたんだが、流石はレオガイガー。

不屈の精神で再び立ち上がったようだ。

しかし、いくら今日が休日とはいえ、午前中から始めて、もう一時過ぎ。

いい加減俺も疲れてきたし、そろそろ止めようか、なんて思って口を開きかけた……んだが。

「うん！ 今度もヤコがおにいちやんに褒めてもらっちゃうんだから、負けないよー！」

と、やる気満々なヤコの言葉で、タイミングを逃して渋々コントローラーをとったのだった。

そして、その結果は、やはりというか、なんというか……ヤコの勝利。

ネコは頂垂れ、ヤコは俺の膝の上で、猫のように喉をならしている。ヤコを撫でながらも、チラリとネコを見ると、相当落ち込んでいるんだろう、さつきよりも瞳を潤ませ、それでもコントローラーに手を伸ばしていた。

俺は呆れたように声をかける。

「なあ、そろそろ止めようぜ？ 俺もそろそろ疲れたし、な？」

「……ダメ。せ、せめて……せめて一回くらい……」

ネコの瞳は真剣で、コントローラーをしっかりと握っていた。俺も頑張ってはみたんだが、ネコとご機嫌なヤコに押し切られてしまい、結局その後も全戦全敗。

さすがに9連敗目で、二桁に突入するのはマズイと思った俺は、時間を理由に無理矢理ゲームを切って、ヤコの家を出た。

俺の家はヤコの家の隣りなのだが、少し家が遠いネコを送るのは、三人でヤコの家で遊んだ時のルールのようなものだ。

と、言っても俺が勝手にやってることで、誰に言われたわけじゃないんだけどな。

だいたい、レオガイガーを送る必要性はないんだし。

止めてもいいんだけど、ま、気分の問題ってことで。

さて、隣りを歩くネコは当然ながら、思いつきり落ち込んでいる。

「まあ、そんなに気にするなよ。たかがゲームだろ？」

「うん……」

頷きはしたネコだが、やはり落ち込んだまま。

俺は困ってしまい、ワンワンワンと犬のお巡りさんのように鳴き

——心の中で、だが——頭を抱えていた。

そもそも、どうしてあそこまで勝負に拘ったのがよくわからない。ネコは確かに負けず嫌いな方ではあるが、あそこまで拘る事はあまりない。

そこまで、ヤコに負けるのは嫌だったんだろうか？

俺にはよくわからないが、それが姉のプライドって奴なんだろうな。

「まあ、妹分に負けたのが悔しいのはわからなくもないけど——」
「ち、違うのっ！」

俺は大人ぶって理解を示そうとしたんだが、ネコの声に遮られた。思わず首を傾げてしまう俺。

「違う？何が違うんだ？」

「だ、だから……私が落ち込んでるのは……その、ヤコに負けたのが……悔しいからじゃなくて……えっと……ヤコばかり……ってたから……わ、私も……て欲しかったから……」

ネコが小さくボソボソ言うもんだから、ところどころ聞こえなかった。

やっぱりよくわからなくて、俺が首を傾げていると、ネコはじれったくなつたのか、いきなり大きな声を出した。

「だから、ヤコばかり褒めて貰ってたから、わ、私も褒めて欲しかったの！」

顔を紅葉みたいに真っ赤に染めて叫んで、呆けていた俺を置いて小走りで先に行ってしまうネコ。

俺はその意外だった言葉の意味を理解して、思わず笑顔を零してしまった。

先に行ってしまったネコを追いかけて、俺は走った。

すぐに追いついた俺は、首筋まで赤くしているネコの頭をちよっと乱暴にくしゃりとやって、声を掛けた。

声が勝手に弾んでた理由なんて知ったこっちゃない。

「よしよし、ネコは頑張ったな」

ネコはびっくりしたように、目を大きく開いて。

次の瞬間には満面の笑みを見せてくれた。

照れくさそうに一つ頷いて、見えてきた家に駆けていくネコ。

俺は、ネコが家の前で一度振り返って大きく手を振り、家に飛び込むように走って行ったのを見届けてから、ゆっくりと来た道に戻っ

た。

それにしても……ネコとヤコをニブチンだニブチンだと言っていた俺だが。

どうやら俺も、お仲間だったらしい。

歩きながら、俺は自分に呆れて溜息をついたのだが、気づけばいつの間にか笑みが浮かんでいたのは――

沈みかけた夕陽を見て、ネコの染まった頬を思い出したからなのか
もしれない、なんて、なんとなく考えていた。

第4話：日常～休日編～（後書き）

第4話まで読んで頂いて、嬉しすぎて倒れそうなひるこです^^

今回はネコ重視で書いてみましたw
するとどうでしょう！

なんとなく作風が違って見えるから不思議です。（自意識過剰？）
いかがでしたでしょうか？

ネコをほんの少しでも好きになっていただければ幸いですw

さて、突然ですが昨日までにプロローグを読んでしまっている方に、
この場をお借りして、ご連絡と謝罪をさせていただきます。

ネコとヤコの身長が、イメージと食い違っておりましたので、訂正
させていただきました。

既にプロローグを読んでくださった方にはご迷惑をおかけし
ます……

申し訳ございませんでした。

さ、さて、こんな作者が書く小説ですが、次の話も読んでくださる
と信じて

しーゆーあげいんです！

第5話：作戦日／冬でも怪談編／

今日はブラックローズの活動日だ。

活動日は基本的に決まっているわけではない。

その日の総帥・ブラックゲン大帝の気分と運で、その日の活動の有無が決めるのだ。

一応、ブラックゲン大帝は、聖獣仮面達に活動日を予測させないため、複雑な規則性に則って決められていると言っているが。

俺は、鉛筆を転がして活動の有無を決めているブラックゲン大帝を見たことがあるから、まず間違いはないだろう。

まあ、ヤコが“複雑な規則性に則って”という文句に憧れを覚えているらしく――

「今日は活動日だ。皆、頑張るように！」

「了解であります！ふくざつなきそくせいにとって、今日は活動日ですね！」

「そうだぞ、ブラックナイト。決してコインの表裏で決めたわけではない！」

――なんてやり取りを、ちよくちよくしている。

と、まあ、そんなこんなで、今俺たちは、車で――ドライバーは、なんとおさる兵（免許持ち）だ――怪談を流しながら、街を走っている。

これぞ名付けて、『冬に怖い話で寒くしちゃうぞ大作戦』だ！

……いや、これはヤコが発案したのであって、断じて俺のセンスではない事を言っておく。

さて、その当のヤコ……もといブラックナイトは、今、耳を両手で塞いで車の後ろで小さくなって震えている。

今にも泣きそうなブラックナイトに、周りのおさる兵達がおろおろ

しちゃってるし。

怖がりなんだから、こんな作戦立てなきゃいいのに。
俺はそんなヤコの代わりに、怖い話を音読中。

「そこで、A子さんは、男子トイレのタロ子さんと目を――」

因みに、あまり遅く走ると世間様のご迷惑になるので、最低限の速度は維持している。

そのため、当然ながら話を一話全部聞いてる人は、そうそう居ないということになる。

ハッキリと無駄だろう。

しかし、それでもお仕事なんだから、と、キチンと仕事をこなす俺
まあ、これならレオガイガーも来ないだろうし、良いっちゃ良いんだけど……。

なんて、油断していた俺が悪かった。

ガッシャーン

「――っ!？」

衝撃と共に、破壊音が聞こえる。

それと同時にスピーカーが反応しなくなったから、おそらくスピーカーが壊されたのだろう。

犯人はわかってる。

今、止まっている車の目の前に立って、こっちを睨んでいるレオガイガー。

まあ、普通に考えて、明らかにこいつだよな。

「こ、怖い話をこんな街中にするなんて……ゆ、許さないんだから！」

あ、そういやネコも苦手だっけ、こういうの。

三人でお泊り会の時も、怪談は二人に即却下されたんだった。

「よ、夜におトイレに行けなくするつもりなんでしょ！？　そうはさせないわ！」

いや、違いますよ。

っていうか、なんで聞こえてたんだろ？

一箇所には留まっただけだと思っただけ……。

「ブラックローズの車を見たから追ってみれば……こ、こんなことするなんて！」

なるほど、わざわざつけていたせいで、全部聞いちゃったんだ。
ドジな奴だ。

まあ、求めていた効果とは違うけど、少なくとも一人は聞いてくれたんだから、あの音読は無駄ではなかった……のかな？

俺は車から普通に降りた。

それについてくるように、ブラックナイトやおさる兵達も颯爽と降りてくる。

そしていつもの“お決まり”を始める。

本来はブラックナイトがやるべきなんだろうけど、なんかまだ震えてるし、今日は代わりに俺がやることにする。

「おのれレオガイガー！　邪魔はさせんぞ！　行け、おさる兵達！」

ウキーウキーという声と共におさる兵達——車の乗車可能人数の都合で5名（匹？）のみ——がレオガイガーに襲い掛かる！

1・2・3——ま、頑張った方だよな。

普段はもつと大勢でもやられてるのに、5名だけだもんなあ。

俺はおさる兵達の屍——実際に死んだわけではないが——を見ながら、一人頷いていた。

しかし、当然ながらブラックナイトは大ショックの様子。

「おさる兵さん達が……おさる兵さん達があ！ ひつく……つく……う、うえ……ん！」

あゝあ、泣いちゃったよ。

俺は仕方ないので悪役代表を続行する。

「お、おのれえ。こうなったら、最後の手段だ！」

そう言つて、俺は車に駆け込んで、ただ一人残っていたドライバーのおさる兵の口にバナナを突っ込む。

いきなりブオンブオンとエンジンをふかし始めたおさる兵。説明しよう。

おさる兵はバナナを食べるとやる気がグ~~~~ンと上がるのだ。

「行け！ 魔運転（マウンテン）おさる兵！！」

ま、ただの張り切ってるおさる兵なんだけどね。

レオガイガーに、勢い良く突っ込む魔運転おさる兵。

そして、計っていたかのような、ナイスなタイミングで響く二つの声。

「待たせたな！ 聖獣仮面ウルガイガー、参上！」

「同じく、ドラガイガー、推参！」

登場した二人の聖獣仮面。

これで聖獣仮面が勢揃いか。

俺は腕時計をチラリと見る。

そろそろ時間も良い頃だ。

俺の背中もブラックナイトの涙やら鼻水やらでグッシヨリだし……。さつきから、ずっと抱きついたまま泣いてたからなあ。

「ええい、構わん！ やってしまえ、魔運転おさる兵！！」

「そうはさせないわ！ 二人とも、ガイガーシュートよ！」

「「おうつ！」」

どこから取り出したのか、三人はそれぞれ武器を出し、それらが合体して、一つの大きな銃になった。

そんな三人に突っ込む魔運転おさる兵。

あ、因みに、さつきまでのシーンで攻撃しちゃダメってのいうは暗黙の了解だ。

魔運転おさる兵も、ちゃんと車を止めて待っていたようだ。

そんな、心優しいフェアな魔運転おさる兵に、無情にも向けられる砲門。

「「「ガイガーシュート！！！」」」

ドッカーーン

木端微塵に吹き飛んだ車。

キラリと星になった——実際にどうなったのかは企業秘密だ——魔運転おさる兵。

「おのれえ……覚えてるがいい、聖獣仮面達よ！！！」

最後に思いつきり大きな声で終わりを宣言して、と。

魔運転おさる兵の最期に、さらに泣いてしまったブラックナイトを抱えて、俺は全力で走って逃げた。

聖獣仮面は追って来ない。

何故なら――

「平和を乱す奴らは私達が許さない！」

――なんて、決めポーズをして、いつの間にか集まった野次馬達へのファンサービスに大忙しだからだ。
毎度の事ながら、ホントご苦労様。

その夜――。

ピンポン

ああ、来た来た。俺は苦笑を浮かべながら玄関へと向かう。
ドアを開けてやれば、そこには予想通りの顔があった。

「え、えつと。今日は泊ってもいい……？」

恥ずかしそうに、ちょっと頬を染めながら尋ねてくるネコ。
俺は、なるべく優しく笑って、一つ頷いてからネコを迎え入れた。
それと同時にドタドタと、リビングの方から走ってくる先客の足音が聞こえてくる。

「あ、ネコちゃん！ ネコちゃんもお泊りなの？」

「え、ええ。た、たまには良いかと思つて。ヤコモなの？」

「うん……今日ね、怖い話を聞いたから怖くつて」

二人とも、昔から怖い話を聞いた夜は、何故かうちに泊りに来てた

んだよなあ。

その夜は、久々に三人で布団を並べて敷いて寝たのだが。

「これじゃ、川の子っていうより、どっちかと言うと『小』の子の方が近い気がする……」

俺の両腕を、それぞれ抱き込むように丸まって眠る二人を見て、俺はこっそり溜息をついたのだった。

第5話：作戦日／冬でも怪談編（後書き）

どーも、ひるこです^^

ツンデレ小説を書いていて、こちらのupがおそくなりました^^；

唐突ですが、アクセス数が凄いですw

PVアクセスでは一日1000を超え、ユニークアクセスでも700を超えました！

目指せ、明日のアクセスランキングベスト5！（注：評価ランキングとは別物です）

さて、感動も伝えさせて頂きましたので、本題です。

今回は戦隊らしく闘っていただきました！（拍手）

でも、なんだろ……不満？

だって……ヤコとか、ネコとか、ヤコとかの可愛らしさが、今回はあまり出せなかったし……。

ああ、理想があるのにそれを表現するだけの実力がない悲しさ……；

と、いうことで、クリスマスプレゼントには文才が欲しい、ひるこでしたw

それではまた次のお話を読んでくださると信じて

しーゆーあげいん！

第6話：お熱の時は側にいて

ピピッ……ピピッ……ピピッ……

「うーん、やっぱり熱があるな」

小さなモニターに表示された数字は“37.5”。

ベッドでうんうんと可愛らしくうなるのは、ブラックローズで一番の頑張り屋さん。

昨日のティッシュ配り——ブラックローズの隊員募集の——は結構遅くまでやってたもんなあ。

「今日はゆつくり寝てるんだぞ？ 学校が休みで良かったなあ」

今日は祝日で学校は休みだ——ネコは生徒会の仕事があるとかで、ヤコを気にながらも学校へ向かった。

俺は、熱のせいで顔をうつすらと赤くしているヤコを優しく撫でてやった。

ヤコは苦しそうではあったが、目を細めて頷いた。

さてと、とりあえず薬と水枕を取ってきますか。

立ち上がる俺。

しかし、そんな俺の裾を握るしつかと小さな手。

「おにいちゃ……どこ行くの？ どこにも、行っちゃ、やあ……」

ウルウルと瞳を潤ませて俺を不安げに見つめるヤコ。

俺は苦笑を浮かべて腰を下ろし、もう一度ヤコを撫でてやりながら、「すぐ戻るから」と言っ、今度こそ立ち上がった。

今度はヤコも——不安げに揺れる瞳は変わらないが——袖を握って

はいなかった。

部屋を出れば、なるべく早く戻ってやろうと急ぎ足で薬箱と水枕を探しに向かった。

小さな頃から出入りしているヤコの家だ。

薬箱は少し探すとすぐに見つけることができた。

しかし、水枕だけがどうしても見つけることができなかった。

誰かに聞こうにも、ヤコの両親——黒野 元・玲子（げん・れいこ）夫妻——は、悪の組織連合の総会に出席していて、昨夜から留守だ。かといってヤコに聞くわけにもいくまい。

となると、聞く相手は……あの人だけか。

俺は『月子』と書かれたプレートが下がる部屋の前で、一人立ち竦んでいた。

時刻はまもなく午前11時。

この部屋の主は、おそらくまだ起床してはいまい、そういう人だ。

そして俺は彼女を起こさなくてはならないのだ。

その行為が自殺行為であることは十分理解している、が！

俺はヤコのために、この危険極まりない行為を——

ガチャ

「あらカイト君、いらっしやい。私に用かしら？ 部屋の前ですつと立ってみたいだけど」

俺がウダウダやっている間に、問題の扉から出てきたキツイ感じの美人。

セクシーな黒い下着を隠そうともせず、俺にニコリと微笑む彼女が、ヤコの実の姉にしてブラックローズの大將軍・ブラックムーン、黒野 月子（くるの つきこ）さんその人だ。

良かった、起きていてくれたらしい。

因みに、昔、おさる兵がツキコさんを起こしに行ったことがあった

のだが……。

謎の悲鳴——おさる兵の——が響き、その後彼の行方を知る者はいないという。

幸い、今日は起きていてくれたので命は助かったようだ。

「きよ、今日はもう起きてたんですね」

「ええ、今日はお昼から大学に呼ばれているの」

その豊かな胸を前に出し、黒くて艶々とした長い髪を掻き揚げるツキコさん。

俺は目のやり場に困りながらも、その動作にドキツとしてしまう。ツキコさんは、21歳の大学生で、ヤコの姉とは思えないほどセクシーな人だ。

そんな人の下着姿を見て、赤面してしまうのはしかたないだろう。顔は火照ったままだが、いつまでもこうしているわけにもいかない。俺はヤコのために水枕を探さなくてはいけないのだ。

「あ、あのですね。や、ヤコが熱を出していて、水枕を探しているんですが……」

「ヤコが？ あらあら、それは大変じゃない。今日は両親もいないのに」

「そうなんですよ。元さんにヤコの事頼まれてたんで来てみたら、熱で苦しそうに唸ってて」

「とりあえず、薬と水枕ね。あら、薬は見つけたの？ じゃあ後は水枕ね。えっと、確か居間の押入れの中だったと思うんだけど……」

ヤコが熱を出したと聞いて表情を変えるツキコさん。

水枕を出すために居間へと向かうツキコさんについていく俺。

水枕は押入れの奥に埋まるように仕舞ってあった。

それに水と氷を入れて、タオルで包んでヤコの部屋へと向かう。
ツキコさんは、俺が水枕の準備をしている間に着替えてくれたらしく、ほっとしたような残念なような。

「ヤコ、熱出たんだって？ 大丈夫なの？」

「あ、お姉ちゃ……うん、大丈夫、だよ」

熱っぽい声で答えつつ、起き上がって見せようとするヤコの額を、ペシッと叩く俺。

「コラッ。大丈夫じゃないだろうが、37度5分もあるってのに」

「あうっ。ご、ごめんなさい……」

「そうよ、無理はしないで、今日は一日安静にしてなさい！」

「うう……はい」

シヨボンとしながらも頷くヤコを撫でてから、俺に目をやるツキコさん。

「じゃあカイト君、私はさっきも言ったけど大学に行かなくちゃいけないの。悪いんだけど、ヤコのことお願いね？」

ツキコさんは申し訳なさそうに俺にヤコの事を頼んで、大学へと向かった。

さて、これでヤコと二人きりになったわけだが。
看病って何をしてやれば良いんだろうか？

あ、タオルを水で濡らしておでこに乗せてやろう！

「ヤコ、今濡れタオル取ってきてやるな」

「やあ……待つて……」

再現される光景。

ヤコの小さな手がしつかと俺の裾を掴んでいる。

「タオル……いないから…ヤコの側、いて……？」

だから……そんな目で見つめられたら、断るなんてできないだろうが。

結局座り直して、ヤコの頭を撫でてる俺。

ヤコは俺がどこかに行くのではと、まだ不安なのか目を閉じること
もせず、今度は俺の袖をキュツと握っている。

そんなヤコを見て、俺はくすくすと笑いながら、優しく囁く。

「大丈夫、どこにも行かないから。安心して寝てろ」

「……ホント？」

「ホントホント。どうしても不安なら俺がヤコの手を握っててやる
から、な？」

俺はそう言つて、袖を掴んでいたヤコの可愛らしい手をやんわりと
握ってやった。

ヤコの手はとても熱かった。

ギュツと握り返される手。

ヤコはやつと安心したのか、目をゆっくりと伏せて、コクリと一つ
頷いた。

それからヤコが寝るまで俺は、空いている方の手で優しく頭を撫で
続けていた。

ヤコが寝息を溢し始めるまで、さほど時間は掛からなかった。

「さてと。おかゆでも作ってくるか」

三度繰り返される光景。

ヤコは、寝ているのにも関わらず、俺の手を離そうとしなかった。俺は一食くらい抜くのは構わないけど、何も食べないのは病人には良くないだろう。

仕方ないので、ヤコの指を一本一本外していく。

しかし、最後の一本のところ、改めてギュツと握られてしまう。

俺は苦笑を浮かべて、もう一度指を外し始め、今度は全部外す事ができた。

ヤコを起こさないように、そっと部屋を出て台所に向かう。

コトコトコト

小さな土鍋を火にかける。

一応俺にだってお粥くらい作れるんだぞ、と言いたところだが、どうやらツキコさんが出る前に用意していつてくれたのだろう。

台所には、後は温めるだけで食べれる状態のお粥が、この土鍋に入られて置かれていた。

俺はそれを火にかけているだけだったりする。

あ、念のため言うておくが、本当は俺だってお粥くらいは作れるぞ？まあ、そこまで上手いとは言えないけどな。

さて、そろそろ出来上がりかな？

土鍋の蓋を開けて中の様子を見ようとした瞬間――

ドンッ

――という衝撃が走る。

幸いまだ触れていなかったんで、お粥に被害はないし、ギリギリで火傷もしなかった。

さてさて、そんな危険な真似をした犯人はというと……俺の腰にギュツと抱き付いていた。

「ヤコ、こんな事したら危な——」

「おにいちゃん……つく、どこにも行かないって、ゆったあ……」

「——い、だろ……いや、確かに俺が悪かったな。どこにも行かないって言ったもんな」

「……つく…行かないっ、ゆったのに……起きたら…おにいちゃん、ずずっ……いなくて」

「わかったわかった、お粥を作ったらすぐ戻るから。だから泣かないで部屋に戻ってるって、な？」

「ひつく……やだもん…ヤコ離さないもん」

いつになく我が儘なヤコ姫。

逃がさないと言わんばかりにぎゅーっと抱きつくヤコ。

俺は何度も説得したんだが……。

結局溜息をつきながらも、動きにくいのを我慢してお粥を完成させ、なんとかヤコの部屋へと戻ったのだった。

その後俺は、部屋に戻っても機嫌の直らないヤコ姫のご要望で、ふーふー&あーんのコンボをさせられる羽目になった。

そんな看護の甲斐あってか、ヤコは夜には大分回復していた。

「おにいちゃん、今日はありがと！」

「まったく、我が儘姫にはホントに手こずったぞ？」

「えへへ、ごめんね？ その代わり、おにいちゃんがお風邪の時はヤコが看病してあげるね！」

これだけ元気なら、今夜一晚眠れば明日には元気一杯のヤコが見れるだろう。

俺はどこかほっとして、ヤコの言葉に頷くのだった。

「ただいまー！ ヤコー、体調はどうおー？」

「戻ったぞー！ ヤコー！ 熱を出したと聞いたが大丈夫なのか！

「？」

「ただいま、ってあら、あなた……お靴を脱ぐの忘れてますよ？」

「ヤコ！ 遅くなってゴメンね！ お見舞いに来たわよ？」

と、今のは上から順に、ツキコさん、元さん、玲子さん、ネコの声。どうやら皆一気に帰って——若干一名は別だが——来たらしい。そんな声を聞いた俺とヤコは顔を合わせて、なんとなく笑っていたのだった。

第6話：お熱の時は側にいて（後書き）

どうも、昨日、念願のアクセスランキング3位になって今にも躍り出しそうなひるこです^^

おかげさまで、3位になってました！

まあ、一日だけでしたが……（笑）

読んで下さった方々。

本当にありがとうございます！

さて、今回の話ですが……初のセクシーキャラを登場させたにも関わらず、ヤコ！ヤコ！ヤコ！！ヤコ！！でした（笑）

ヤコはホント可愛いですwww

……と、書いてきたひるこですが。

そろそろ、ネタが切れそうです（T―T）

このままでは連載がぁ……

と、いうことで、ネタ・リクエストを募集しますwww

ヤコ・ネコ・カイトにこんな事させたい、こんなイベントが欲しい等ございましたら、是非是非そのアイデアをくださいませwww可能な限り実現していきたいと思いますのでwww

なお、ネタ・リクエスト等は、作者ページのメッセージが評価・感想のところをお願いしますw

読者様に頼るといふ反則技（？）を使おうとしているひるこですが、今後も見捨てずに、応援よろしくお願いいたしますw

それでは、次の話も読んで頂けると信じて

しーゆーあげいんw

第7話：波乱のクリスマスイブ／前編

「おにいちゃん！ こっちだよ！ 早くしないと売り切れちゃうよ」

人でごった返す商店街。

俺は今にも泣きそうなヤコに手を引かれながら、苦笑を浮かべてため息を一つ。

「大丈夫。あんなの絶対に売り切れないって」

「そ、そんなの分かんないよ！ だって今日はクリスマスだもん！」

そう、今日は聖なる日、クリスマス——正確にはクリスマスイブだけれど——だ。

普段は寂れてる、近所の千隊商店街も、この時期ばかりはご覧の通り人だらけだ。

さて、そんな人だらけな場所で、なんでまたこんなにも急かされながら走ってるのかというと——

「ゾンガイガーケーキはいつも3つしかないんだよ？ 今年は予約してないんだから危ないよ！」

そう、俺をモチーフにしたケーキを買うためだ。

この千隊町では勿論、この辺り一帯ではレオガイガー達とブラックローズとの戦いは名物——実際、おさる兵グズや聖獣仮面グズ、ブラックローズグズとかがあちらこちらで売られている——になっている。

勿論クリスマスにはその名物を前面に持ってくるのは必然とも言える。

故に、クリスマスにその名物キャラ達をモチーフにしたケーキが売られるのも、何の不思議もない。

だが、その生産個数は需要と供給のバランスを考えて決められるのだ。

こんなキャラ物を買うのはお子様達だ。

お子様達に人気があるのは、やはりいつも勝利する正義のヒーロー達。

そんなヒーロー達を裏切って悪の手先になった、死獣仮面は当然のように嫌われ者だ。

と、ここまで説明すれば嫌でも分かっただろう？

そう、ゾンガイガーケーキは売れないからケーキ屋さんでは僅かしか売ってないのだ！

どうやら毎年三つは売れるらしく——ただし、4つ目を求めてきた客は今のところいないらしいが——ここの商店街のケーキ屋では、毎年キツチリ三つだけゾンガイガーケーキを置いているのだ。

で、ヤコは毎年そのうちの一つをしっかりと予約して買ってくれてるわけなんだが、今年は予約係だったヤコのパパ——総帥・ブラックゲン大帝——が予約を忘れていたらしく、それをついさっき知ったヤコは大泣き。

ブラックゲン大帝をボッコボコにしていたところを俺が止めて、急いで買いに行くという提案でなんとか総帥を救い出したのだ。

本当は電話を一本入れればいいだけなんだが、ヤコは話を聞かずに俺の手を、ブラックナイトの超人的なパワーで引っ張ってきたってわけだ。

まあ、普通に考えて毎年三つしか売れないものが売り切れるなんて

ありえないと思うんだが……なんて、考えていた俺が間違いだっらしい。

実際についてみるとケーキは売り切れ。

うちのお姫様は今にも涙のダムが決壊寸前。

「お、落ち着けヤコ！ ケーキくらい大した問題じゃないだろ?! ほら、あっちでおさる兵のキーホルダー買ってやるから、な!？」
「ひつく……けえき……おにいちゃんの……っ」

まあ、分かりきったことではあるが、当然こんなことではダムの決壊は防げるわけもなく、もうダメかと思ったその時――

「予約してた夏木ですけど」
「ネコ!？」

そう、そこにいたのはネコだった。
しかも、その手には――

「あ、ゾンガイガーケーキだ!」

その手には三個しかない――不人気だからというのが切ない――ゾンガイガーケーキが!

その視線に気づいたのか慌てて後ろにケーキを隠すネコ。

ネコは視線を泳がせながらやたらと早口で――

「ち、違うのよ、これは、その、た、たまたま残ってたから、その、しょうがなくて!」

残ってたわけではないのだ、今現在そのせいでヤコは泣きそうなわけ……。

これはまずいなと思ったね。

これはどうフォローしようかと頭を回していた矢先、唐突にヤコが
一歩前に出た――

「そ、そうなんだ！ や、ヤコね、そのケーキ欲しかったんだけど

……」

「……えっ!？」

あー、どうやらケーキ欲しさいつもの鈍さに拍車がかかっている
ようだ…… よ、良かったあ。

あとはネコがヤコにケーキを上げれば全てかいけ――

「だ、ダメよ!」

――つ……あれ？

えーと……ええええええええええええ!？

第7話：波乱のクリスマスイブ〜前編〜（後書き）

どーもお久しぶりですwww
ひるこでございますwww

なんというか・・・久々に作者ページ見て、感想ついてたんで浮か
れて続編を書いたんです

そしたら・・・もうダメです・・・私はもう引退でしょうか・・・

もともと酷かったのが更に酷くなってましたw
しかも一話に収まらず、前編になった、と

ほんとにごめんなさい^^;

それでももしも続きを読んでもくださるといってお優しい方がいらっし
やるなら・・・

と、いうかいることを願って!!!

しーゆーあげいん!!!!

第8話：波乱のクリスマスイブ〜後編〜

「だ、ダメよ!」

凍りつく場。

俺は現状がちよつと理解できなくて硬直してしまった。
だってそうだろう? あのヤコ大好きっ子のネコが、だ。
ヤコの欲しいものをやらないなんて!

しかも、たかがケーキ一個。

俺には到底信じられないっての。

ネコが大事そうに、しっかりと抱きしめているケーキ。
そのケーキを見ながら今にも泣き出しそうなヤコ。

「だ、だって……これは…私クリスマスにはカイトと会えないし…
…」

ヤコはその言葉を聞いて不思議そうに首を傾げる。

しかし、俺は溜め息とともに状況を理解した。

クリスマスは親睦を深める大事なイベントだ。

当然ながら俺達ブラックローズや聖獣仮面達もご多分に漏れず仲間達とクリスマス会を楽しむ。

しかしこれまた当然敵対するこの二つの団体が仲良くクリスマスを過ごすわけがない。

そこでネコはクリスマスにゾンガイガーのケーキを食べることで俺と一緒に過ごしてる気分を味わっていたわけだ。

故に――

「だ、ダメ……これだけは譲れないわ!」

「ネコちゃん是要らないんでしょ? 何で意地悪するの……?」

「や、やっぱり必要になったの！　急にゾンガイガーのケーキを食べたくなったのよ！」

と、こうなるわけだ。

まあ、嬉しいような下らないような理由ではあるが、このままでは悪の騎士ブラックナイトが——涙ながらに——大暴れという大惨事になりかねない。

そんな事になれば被害は——特に俺の被害は——甚大だろう。俺はなんとか止めたいのだが——

「な、泣いてもこれだけはダメなの！」

「う……う……」

——と、既にどちらも涙を瞳一杯に浮かべて一触即発の状況だ。

下手に触れればダブルで爆発しかねない。

まあ、普通に考えてあのケーキはネコが買ったんだから、あれはネコのものだ。

ならば我が儘な小さなお姫様を宥めるしかあるまい。

俺は全力で史上最強の敵にジャブを繰り出す！

「な、なあヤコ、他のケーキ買ってやるから今回は我慢しよ？　な？」

「やだもん！」

相手は常に全力、ジャブに対して強力なストレートを打ち出してきた。

しかし、俺も町の平和——主に俺の平和——を背負っているのだ。ここで怯むわけにはいない！

「じゃあ今年のクリスマスはケーキなしだぞ！」

と、強めのフックを打ち出す俺。しかし――

「おにいちや、ツク、ん……ヤコが、えぐう……嫌いなんだあ!」

と、カウンターパンチをクリーンヒットで食らってしまふ。

ヤコの大きな瞳からポロリポロリと零れる必殺のストレート。

今のうちに言っておく。

俺はもうボロボロだったのだ。

ノックアウト寸前。もはや正常な判断なんてできない状態だったんだ!

だから――

「わ、わかった……なら、ケーキを我慢すればデートしてやる……」
――とか言ってしまったんだあ!

しまったと思ったね。

これはネコに聞かせるのはまずかった。

しかし、時既に遅く、ピタリと泣き止んだヤコとばかりと固まるネコ。

時が凍る。

無限に続くかと思えた沈黙を破ったのはヤコだった。

「わかった! なら我慢するね。じゃあ帰ろ!」

なんとかネコに言い訳しようとする俺をご機嫌で引きずっていくヤコ。

ネコに伸ばした俺の手は、無情にも空を泳いだのだった。

その夜のパーティで、俺が始終俯いて頭を抑えていたことは言うま

でもない。

第8話：波乱のクリスマスイブ〜後編〜（後書き）

お久しぶりでございますw

ひるこですw

最近口内炎が舌にできて食事が大変痛いです（それでも食べますけどね！）

さて、前回前編を書いて勝手に落胆していた私ですが、励まшыや応援などをいただき、続きを楽しみにしてくれている人がいるうちは無理矢理でも続けてれたらな、なんて思って書きました。

その結果がこれです。

やはり酷いですねえ……それでも今の全力は出しました！
ぜひアドバイス、感想いただけると嬉しいですwww

あと先日質問があつたのですが、お一人で何度も感想を書いて下さつても構いません——と、というか歓迎です！

新話投稿の度に感想をいただけたりすると、とてもやる気が出てきます！

ですので厳しい意見やアドバイスなど色々あると思いますが、心おきなく言つてくだされば、と思いますwww

話の流れ的に次はヤコとのデートかな？

まあ、その辺はどうなるかは分かりませんが、次があつたらまた読んでくださいませwww

では、またの出会いを信じてシーユアゲイン！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1082d/>

悪役も大変なんです

2010年10月10日07時29分発行